

【第 2 編 金融 4-5】マクロ統計とドル円相場～前編～

(1) マクロ統計

→その国内における全体的な統計のこと

cf.物価、貿易、金利、金融政策、為替介入

→国内総生産や鉱工業生産指数、消費者物価指数など

一国の経済全体の動きを示す統計のこと

(2) アメリカのマクロ統計

①米ドルは世界の基軸通貨であり、取引高も圧倒的(40%)

→ドル・円相場はもちろん、

ユーロ(・ドル)相場などその他のメジャー・カレンシーの相場にも影響

②こうしたマクロ統計を読み取ることも

今後の為替動向を考える上では非常に重要

(3) 米国雇用統計

①米国労働省((U.S Department of Labor Bureau of Labor Statistics)

による毎月の調査

→毎月第 1 金曜日(＝第一次推計値・速報値)

労働統計局が用意した全米調査票を使って

調査月の 12 日を含む週の労働調査を中心にデータ収集

その 12 日を含む週の終了から、週間員の金曜日に

発表されるのが「第一次推計値」である

そのため、後に大きく改定されることもあるが、

最初の速報値として、雇用情勢の先行きを占う指標とされる

②特に重要な項目

- ・失業率(→今回)
- ・非農業部門雇用者数(→次回)

(4)失業率

①労働力人口に占める失業者の割合

- ・労働力人口=16歳以上の人口のうち、
就業している人と就活を行っている人との合計

②本当に「良い失業率の改善」なのか？

(例)あまりに不況で就活も諦めたケース

【ケース1】労働力人口1,000万人、失業者100万人

→このときの失業率は？ = **10%** (100万人÷1,000万人×100)

$$\frac{\text{失業者数}}{\text{労働力人口}} \times 100 = \text{失業率}(\%) \quad \frac{100\text{万人}}{1,000\text{万人}} \times 100 = 10\%$$

【ケース2】このとき不況が原因で就職口が見つからず、就活を行っている人が20万人減少したら？ 就職氷河期

= 就活を諦めた人が20万人増えた！

=労働力人口は980万人、失業者は80万人ということ！

→このときの失業率は？ = **8.16%** $\frac{80\text{万人}}{980\text{万人}} \times 100 = 8.16\%$ (80万人÷980万人×100)

→【ケース2】のほうが失業率は改善されたけど...

③労働参加率(Labor Force Participation Rate)

アメリカの人口に対する労働力人口の割合

→「労働参加率の増加」かつ

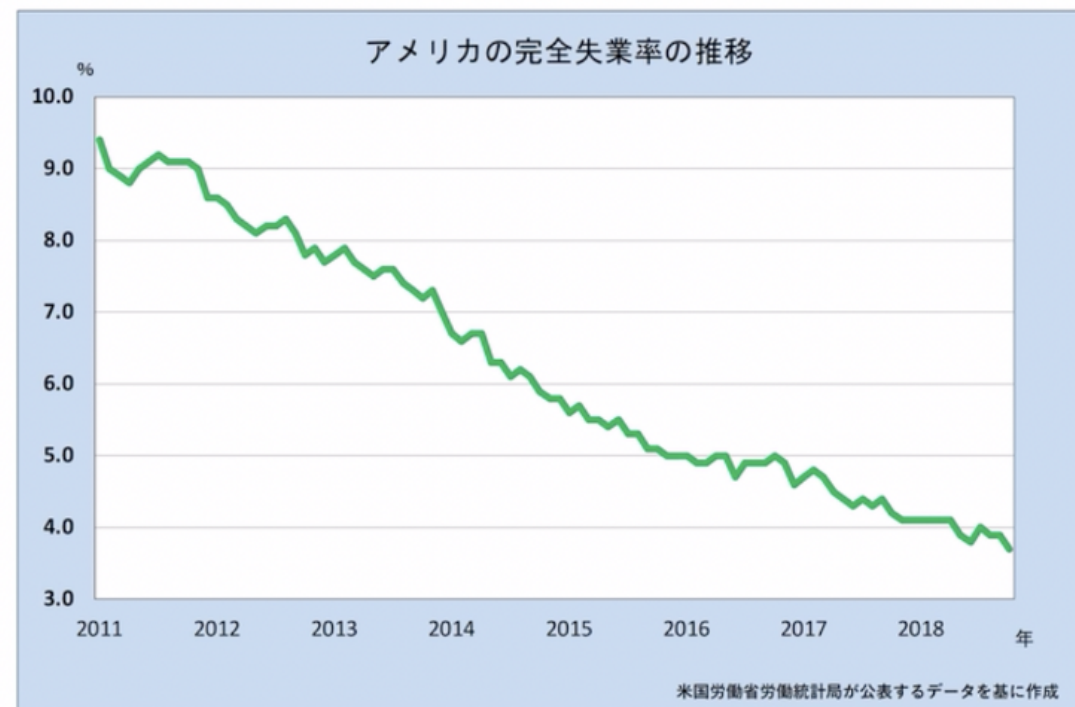
「失業率の低下」こそ

マーケットに好感される材料となる

④完全雇用状態

→4～5%未満が目標

cf.日本は 3%が目標



⑤米経済(GDP)の約 70%は個人消費が占める

・雇用統計改善→賃金上昇&消費拡大→インフレ&金利上昇→ドル買い(ドル高)